

Ian McEwan の *Enduring Love* 試論

終わりのない物語として ——

扇 令 子

要 旨

Ian McEwan の *Enduring Love* (『持続する愛』) (1997) はある意味で「終りのない小説 (物語)」である。この小説のタイトルは主要テーマを示すとともに、小説全体の構造をも暗示する。この小説は大きく分けて三つの物語と三つの結末を持つ。物語の語り手で主人公である科学ジャーナリストのジョー・ローズはジェッド・バリーが突然彼らの生活に侵入してくるまでは恋人クラリッサ・メロンとの誠実で熱烈な愛がずっと続くものと信じていた。バリーは宗教的、同性愛的な妄想に陥ったストーカーとなってジョーにつきまとい愛を求める。不安と恐怖の中、ジョーがバリーの不可解な愛を謎を解くように究明していく過程が「物語一、二、三」の時間的経過に沿っていくが、特に作者が「宗教」をどのように表現しているのかを検討するのが本小論の目的である。

物語の始まりが物語の終り (となるはず) で、(次に続く) 物語りの始まりとなる——まるで子供の謎解き遊びのような仕掛けがしくまれた小説、それが Ian McEwan の *Enduring Love* (1997) である。この小論では、なぜこのような仕掛けが必要で作者の狙いは何かを探っていきたい。

1

小説のタイトル *Enduring Love* (『持続する愛』)¹、それは終ることのない愛であり、そこには小説の主要テーマが集約されている。それと同時にこの小説の内的構造を解き明かすキーワードも含む。*Enduring Love* はある意味でネバーエンディングストーリーと呼べる小説なのである。

この小説には大小いくつもの「物語」²があるが、小説全体の枠組の中で考えると大きく分けて三つの結末が用意されている。最初の物語〈物語一〉は冒頭の第一章で、それ自体で完結するはずであったということが示される。二番目の物語〈物語二〉は第二章から終章の第二十四章までで、第一章で完結しなかった物語の続編である。三番目の物語〈物語三〉は〈物語二〉が終わった後に記載された「付録Ⅰ・Ⅱ」の最終ページで終る。以上三つの物語は作者の明確な目的のもとに有機的に結合している。第一レベルの〈物語一〉は第二レベルの〈物語一+物語二〉でより強固な物語構造へと発展し、第三レベルの〈物語一+物語二〉+〈物語三〉で完結したひとつの全体へと統合される。第一から第三のレベルまで物語は物理的時間と因果律に従い、連続性をもって配置されている。ゆえに全体としての物語の軌跡は過去から現在そして未来へという一本の単線の上をたどることになる。

この物語を語る主導権は主人公ジョー・ローズ (Joe Rose) に与えられる。彼の語り手としての権限は第二レベル〈物語一+物語二〉までである。問題は「付録Ⅰ」「付録Ⅱ」である。

「付録Ⅰ」は精神医学の小論文で、「『イギリス精神医学研究』誌より転載」と注釈がある。執筆者は精神科医師ロバート・ウェンとアントーニオ・キャミア。共同執筆論文のタイトルは「宗教的色彩を帯びた同性愛的強迫観念。ド・クレランボー症候群の一変形」である。研究論文として形式通り序、症例、分析、結論、参考文献が記載されている。「付録Ⅱ」は「ミスタ・J・パリーから回収された手紙、収容後三年目の終わりに書かれたもの。オリジナルは患者のメモと共にファイル。R.ウェン医師の請求により同医師に送布されたコピー」と前書きがあり、ジェッド・パリー (Jed Parry) がジョー・ローズ宛てに書いた手紙が記載されている。

「付録Ⅰ」「付録Ⅱ」はいずれも *Enduring Love* の作者マキューアンによるフィクションである。二つの付録を読んだ読者は、その前に読み終った物語の後日談を聞かされていると感じる。物語は終わっていなかったのである。つまり主人公ジョー・ローズが語った物語〈物語一+物語二〉は終わった。しかし物語は続いている。語り手の役割を受け継ぐのは上記の精神科医たちである。彼らが語るのは患者パリーについての話である。そしてほんの僅かであるが「その後」のジョーと彼の内縁の妻の身上話にも触れてあり、読者をほっとさせる。だがそれも束の間、次に控えている「付録Ⅱ」のパリーの手紙が読者にショックを与える。ジョーには終わっていても、パリーにはジョーとの愛の物語は終わっていないからだ。

このようにして、*Enduring Love* で「付録」という形式を採用して、通常のストーリーテラーの「語り」による「物語」にしなかったのはなぜか。マキューアンの意図は明らかである。ジョーが語った物語ではパリーがド・クレランボー症候群であるとされたのだが、一般読者になじみのないこの専門用語を、科学的に説明し理解してもらおうという魂胆なのだ。R.ウェンとA.キャミアの論文の参考文献は二十点挙げられ、この症候群が病理学の一分野として認知されていることを立証する。ウェンとキャミアは架空の人物だが、参考文献は「本物」である。文献リストの最後に加えられた二人による紀要論文を除いては、こうした念には念を入れた細工はいかにもマキューアンらしいが、それが彼の長所であり欠点でもある。これについては後に触れていきたい。参考文献といえば、小説の本当の結末となるパリーの手紙の後に、作者マキューアン自身の「謝言」がある。そこには十冊の書籍が挙げられ、生命科学、動物行動学、哲学、倫理学、文学（ジョン・キーツとウィリアム・ワーズワス）に渡る。ウェンたちの参考文献二十点（最後の一点はまったくのフィクションというよりオリジナルを脚色したという可能性があるが、論者には確定できない）は小説 *Enduring Love* の題材の信憑性を訴えるものであるが、見方を変えれば、ド・クレランボー症候群に興味を持った読者への読書案内という啓蒙的効能もあるかもしれない。「謝言」の十冊もしかり。逆に合計三十点の専門知識がなければ小説の内容が理解できないのかと脅威に感じる読者も少なくはないだろうが³⁾。ともあれマキューアンがこれらの文献を渉猟して *Enduring Love* の創作をした意気込みは伝わってくる。

しかしマキューアンの「付録」添付という戦術は小説全体の枠組みの中で考えた場合、狙った通りの成果をあげたであろうか。結論を言えば、発想は悪くはなかったが、ド・クレランボー症候群の科学的側面が突出して、パリーの内面的描写が薄っぺらになった点が、この作品の致命的欠陥であると言わざるをえない。この結論を論証するためにジョーの語る物語に戻ることにしたい。

2

ジョー・ローズは四十七才、クラリッサ・メロン (Clarissa Mellon) と七年目の平穏で愛に充ちた同棲生活を送っている。昔二人が恋に落ちた頃、「図体がでかくてぶきっちょで禿げはじめている男」なのに、二人の愛を「激しく抽象的に追求する美しい手紙」を何通も送ってきたクラリッサは、今でも彼にとって美しい恋人である。落ちこぼれ学者との劣等感を拭い去れないものの、ジョーは有名な科学ジャーナリストで無神論者である。クラリッサは「ケルト特有の白い膚と緑の眼」をした美女、ロマン派の詩人ジョン・キーツの研究家で大学に籍を置く学者である。二人はパリーとの偶然による出合いで愛の絆が危うくなるまで、二人の愛は続いていくものと信じて疑わなかった。ジョーは「ほくらの愛はずっと続いてゆく種類のものだといつも思ってきたのだ」(It had always seemed to me that our love was just the kind to endure) と、クラリッサから別れ話があっても信じたくない気持を示している。クラリッサは別居直後ジョー宛ての手紙の中で「この愛はいつまでもいつまでも続く種類のものだとわたしは思ってきました」(I always thought our love was the kind that was meant to go on and on.) と述べ、二人の愛のゆくえに不安と希望を抱いている。この小説のタイトル *Enduring Love* は、ジョーとクラリッサが共に「いつまでも続いてゆく」と確信していた愛が試練を受けるという事を示し、その試練を経て二人が「いつまでも続いてゆく」愛を回復することも示す。

二人の愛に試練を与える存在がジェッド・パリー (Jed Parry) である。ジェッドは二十八才で独身、母親の邸を相続後仕事につかず一人暮らしをしている。神経質で他人との接触を避け信仰を深めてきた彼は、孤独の中、「神の栄光」について瞑想し野山を歩き回り、神は自分に試練を用意しており、自分はそれに応えねばならないと確信するようになる。そしてジョーとの出合いがまさにパリーにとって神が用意した試練の始まりになる。パリーの外観は「背はひよろ高くて骨と筋しかないが、強靱そうだ。……頬骨も肉がなく突き出ており、後ろでまとめた髪とともに、色白のインディアンの勇士を思わせた」が、外観に似ず「弱々しくためらいがちな声」とともに視線を合わせないというのが、ジョーの初対面の印象である。

Enduring Love の主要登場人物の設定はジョー (科学)、クラリッサ (文学・芸術)、パリー (宗教) というように図式的で、この小説は思想小説か観念小説かと予測すると、かなりの摩れが生じてくる。*Enduring Love* は思想と思想、観念と観念の衝突や対立、価値観や万象の絶対性と相対性の考察などを主眼とした小説ではない。ストーリーで読ませるタイプの小説なのである。そしてストーリーの展開の仕方から推理小説にもっとも近いと感じさせる¹⁴。さらにロマンスの要素も加わる。推理小説、探偵小説ではさまざまな手がかりをもとに事件が解決される。それは謎解きであり、それが読者の好奇心を惹きつけていく。*Enduring Love* は、語り手ジョーがパリーという不可解な「謎」を説く物語である。そしてジョーが解いた「謎」の答えが「パリーは「ド・クレランボー症候群」にかかった狂人である」というものである。

ところでこのド・クレランボー症候群の基準は「別の人間と愛を交しているという妄想的確信があること、その人間のほうがはるかに高い地位にいること、その人間のほうが最初に恋に落ちて恋を仕

掛けてきたとすること、発症が突然であること、妄想愛の対象が変化しないこと、患者は愛の対象が自分を愛さないふりをしているだけだと主張すること、症状が長期にわたること、幻覚はなく、知覚力の欠陥もないこと」(付録I)となっており、マキューアンはこの規準に沿ってジョー(社会的に高い地位にある。パリーに特別の感情を抱いていない、ましてや同性愛的感情など)の人物像を創り、一方パリーは、ほぼ基準通りのタイプにした。「患者にとっては、愛は孤立的・自閉的な生活様式となり、他者との結合の可能性は完全に閉ざされる。患者が愛を押しつけようとする人間にとっての悲劇は、いちばん軽い場合でも、患者からのさまざまな干渉およびもっとも親密な人間との関係の破壊であり、最悪の場合には、患者の恨み・嫉妬・性的欲望ゆえの暴力の犠牲となることである」(付録I)という点に関しては、ジョーがパリーのストーカー行為(手紙攻勢、玄関での待ち伏せ、街路からの見張り)によりクラリッサとの関係が別居という危機的状況まで追いこまれるという筋立てとなる。パリーの人物像に関してはどうであろうか。ジョーに「セックスが望みな」とずばり切り返されて憤慨したこと、後に専門医に性的欲望はあるのかと問われ、確かしようとせず怒りだしさえたことから、人間的関係を求めつつ感情的に拒絶されること、親密、とくに性的親密さを怖れるタイプの患者にパリー像を合わせたのである。というよりむしろ、このタイプのド・クレランボー症候群はマキューアンの野心的な小説の完成図には不可欠であったと言うべきかもしれない。

ド・クレランボー症候群と病理学の専門用語で言えば複雑かつ難解な響きがあるが、それが行動に表われるといわゆる「ストーカー」となる。現代の社会問題の一つとして日本でも新聞紙上を賑わしているが、アメリカでは1990年代はじめから各州でストーキング防止法が制定された。イギリスでは1997年(*Enduring Love*の刊行年)ストーカー対策として執ような追いかけやいやがらせを禁じる法律ができた。1998年には5800人が有罪宣告を受け、うち八割が男性だった。2000年には英国政府はストーカー前歴者に警察への登録を義務づける制度を設ける方針を明らかにする。ブレア首相は「悪質ストーカーに発信器を装置し、行動を監視すべきだ」と発言。インターネットを使った「サイバー・ストーカー摘発」も話題となる状況なのである⁵⁾。このような現状をみるにつけ、マキューアンが数年間の準備期間の後に世に問うた⁶⁾ *Enduring Love* が時代の先端を行く作品であったことがわかる。人間の内面の闇に憑かれたかのように処女作以来、性的倒錯や異常心理、逸脱行為など“bizarre”(異様な)、“sinister”(邪悪な)と形容されるものを取り上げてきたマキューアンであることを考えれば、今回のストーカー、パリーはその行為そのものを見れば残酷でもおぞましいものでもない。むしろ逆説的に言えばフィルターをかけ間接的に描写することによって、ストーカーの内面の闇を覗くことができず、それゆえストーカー行為の異常さ、不条理の核にまで達せられなかった。通俗的な、エンターテインメントを目的に書く小説家にとってはストーカーは格好の題材となるだろう。そうした小説家であれば、マキューアンと同じように三角関係の男女を設定することも容易に考えられる。たとえば女一人をめぐる二人の男、一人の男をめぐる二人の女といういわば「正常」な愛の三角関係でもよいし、ホモセクシュアルが犯罪行為として投獄されなくなり、徐々に「市民権」を獲得しつつある昨今であれば、一般常識からいえばまだ「異常な」一人の男をめぐる一人の女と一人の男の愛の三角関係も発想としては可能である。この最後の例が *Enduring Love* の愛の三角関係であるが、

一つ大事な点を指摘しなければならない。以上論者が挙げた男女の組み合わせに共通する愛は、ホモセクシュアルであろうがなかろうが、程度の差こそあれ愛の対象に性愛を抱く愛である。しかし *Enduring Love* が他のケースとまったく異っている点は、そこに「宗教」も取り込んだというところにある。通常の恋愛パターンの変形程度では飽き足らず、個人的レベルの人間関係より更に社会的、歴史的、文明論的レベルまで拡大し、もっとも人間存在の根源に関わる宗教にまで踏みこもうとした——そういう意味でマキューアンにとっても「野心的な作品」になったのである。宗教に触れるのは今回が初めてではない。前作 *Black Dogs* (『黒い犬』) (1992) でヒロインのジューンは神秘体験によって啓示を受け生き方が変わる。体験自体は具体的に語られてはいないが、マキューアンが「宗教」に手をつけ始めたのは確かである。かつて「パンク作家」と有難くない称号をつけられたマキューアンも、*Enduring Love* 出版時四十九才かそこらである。*The child in Time* (『時間のなかの子供』) (1987) 以来、作品の傾向が変わり、特異な想像力と冷徹かつ美的な文体はそのまゝに、テーマは社会的な広がりを見せ始めた作家が、新たな小説世界を切り拓こうとするのは当然のことであろう。*Black Dogs* を経てマキューアンがどのように「宗教」を捉えるのか、読者にとっては極めて興味深い問題である。

マキューアンは正面から宗教に立ち向かわなかった、というよりまだ立ち向かう段階に到らなかったというのが論者の見方である。彼の知性は明晰で分析力に秀れている。「物」を「物」として捉える時の独特の生理的感触、皮膚感覚は硬質であるとともに肉感的で冷めたエロティシズムをかもし出す。感性も洗練されていて暴力を描く時でさえ、激情に流されない抑制力が文体を簡潔で優雅に見せてしまう。マキューアンの特色を一言で要約すれば「職人」ということになる。題材の選択がセンセーショナルなため、彼の従来作品、そしてついにブッカー賞受賞となった *Amsterdam* (『アムステルダム』) (1999) ——アルツハイマーと安楽死を扱った——でも、彼の寸分隙の無い「職人業」が一読しただけでは作品の表面に表われてこないのは、ストーリーテラーとしての彼が一級である証しとなることは間違いない。良くも悪くも破綻がなく美的センスがあつて纏りのある作品を作りあげる技量があるのだが、「宗教」を知性（および理性）と感性を最大限に働かせ、あらゆる手法を駆使して表現しきれぬものであろうか。マキューアンでなくても「宗教」や「信仰」を小説という文学形式で表現するのは生やさしいことではないだろう。題材の問題ではなく作家自身の内面の深化の問題になるからである。該博な知識、論理と感情の均衡、ディタッチメント、相対的な世界観、常識的なレベルでの倫理などでは追いつかない。これらの要素が欠けていても「宗教」「信仰」は、稚拙な技でも伝わるものである。「靈魂」、「魂」、「靈性」と言い慣らされた言葉にこめられた真実に触れることがなければ、読者にどんな形であれ心を揺さぶるものを語ることはできないし、啓示の瞬間をただ「光」というクリシェで記号化してすますことはできないはずである。

マキューアンが宗教を取り上げた意気込みは認めても彼の力量不足は、パリーを一種の道化、もしくは精神的に不安定な思春期から脱しきれない青年、奇妙な思い込みに振り廻されている哀れな夢想

家というイメージを読者に与えることになった。ストーカーの与える不気味さや恐怖はストーカーの被害を受けるジョーのものであって、読者のものではないと感じさせてしまうからである。マキューアンがこの小説で成功した部分は、この小説を推理小説仕立にした事にある。なぜ自分がパリーの妄想愛の対象になったのか、「理性主義者」——クラリッサが冗談半分言ったのだがまさに凶星である——で常識人の科学ジャーナリストには理解できない。度を越してゆくパリーのストーカー行為はジョーを不安と恐怖に陥らせ、狂気へと駆り立てる。事実にもとづき「理性」と「客観性」⁷⁾で物事を分析し理解する習慣が身についたジョーは、パリーのケースを「研究課題」とし、パリーのド・クレランボー症候群特有のキーワード、「合図」、「カーテン」を手がかりにパリーの謎を解いてゆく。その過程は主として連想を頼りに進行してゆくが、矢継ぎばやのアクションと事件の連続がサスペンス効果を上げ、好奇心をそそるジョーの「連想ゲーム」(読者参加型の)はマキューアンの真骨頂といえよう。単なる比喩としてではなく文字通り、子供の「カーテン」遊びとその折、子供が発した「合図」というキーワードが、ジョーに例の「ド・クレランボー症候群」を記憶の中から呼び起こすことになるからである。このような「連想」は小説の全編に張りめぐらせてあり、科学、文学を中心に様々なイメージとキーワードが結びつき響き合い、対比され、それによってアイロニーを生み出し、凡庸な推理小説には望めない奥行きを如実に示している。マキューアンの得意とするパロディ、パステリーシュの手法も、文学・芸術と結びついた時には生彩を放つ。最たるものはジョン・キーツである。詩人への言及は「つれなきたおやめ」、「ギリシャ古甕のうた」、「エンディミオン」からの引用のみならず、逸話、手紙と様々であるが、とりわけキーツにとって永遠の恋人ファニー・ブローンへの手紙は、ジョーとクラリッサの恋愛関係と照合する。そしてこの二人の明るく健康的で熱烈な愛の喜びと至福が *Enduring Love* のロマンス(物語)的側面を示し、パリーの出現と横恋慕によって「愛が試練を受ける」というこれ又、ロマンスの定石が描かれるのである。ジョーとクラリッサという対照的なタイプを恋人たちとして、理性派對感情派の調和と不調和を抽象的ではなく日常生活の日常感覚というリアリズムで描いている。この点もキーツの詩の本質と共通していて見事に対応している。

マキューアンがパリーにジョン・キーツの生いたちをはほぼ忠実に重ねた⁸⁾ことは論者に言わせれば凝りすぎて、結果的には小説の構造の統一性を損ねたと思う。と言うのはパリーにストーカー、キーツ、宗教家の三役を課すのは無謀な試みで、パリーはマキューアンの過剰な期待に応えられなかったからだ。厳密に言えば「普通」のストーカーではなくホモセクシュアルで、しかもド・クレランボー症候群ときては、マキューアンは欲張りすぎた。キーツを援用したのはキーツを軽んじたわけではなく、アイロニーとブラックコメディを狙ったのかもしれないが、あまりに対比の落差が大きく、対比の妙味を味わうにはいささか悪趣味の感がしなくはない。マキューアンがキーツから借用したもので最も効果をあげたのが「書簡」方式であろう。ファニー・ブローンへの熱愛を綴り、恋する者の喜びと不安が交錯するキーツの書簡はパリーのジョーへの書簡に置き換えられる。すなわちジョーが語る〈物語・+物語〉に挿入されたジョー宛ての二通の書簡と「付録Ⅱ」のジョーと隔離されてから三年後に「病棟」で書かれた手紙とも符号する点が多い。初めの二通は、連日ジョーに書

き送った手紙のほんの一部にすぎないのだが、「パリーの手紙がたぎるような確信に満ちていて、あまりに率直に感情を吐露しているので——手紙が描いている感情がいつわりない実体験であるのは確かだ——それなりの反応を起こさずにはいないのだ」とジョーでさえ感じ入るところがある。ここで注意すべき点は、パリーが「いつわりなき実体験」を示す機会は手紙しかないという事実である。なぜならパリーは語り手ジョーの視点と語りを通してしか読者の目に入ってこないからである。ジョーを一人称語り手とした長所は、前述したようにスリルとサスペンスを生み、読者の好奇心を駆りたてて、読者に「物語を語られる快感」を与えることにある⁹⁾。しかし欠点は、ジョーがパリーを科学的に研究し、分析し、事実の積み上げで確証し、彼の愛を「病的な愛」「狂人の愛」と断定する科学者でしかも無神論者であるという点である。ジョーは今まで理性を自分の拠って立つところと信じていたが、パリーとのかかわりの中で、その理性を試され自分で自分が信用できない状態にまで陥る。そして「科学は、人間の本能に真っ向から逆らって理性という人工物押し立てたけれども真実ははくらの本能には打ち勝てない」「客観性によって個人を救うことはできない」と考えるようにはなる。だが彼の宗教的認識は深層心理学の受け売り程度でしかない。つまるところパリーの唯我的でそれゆえ純粋ともいえる個人的な神との関係から生まれる心情と、神との結びつきの中でジョーと愛を交わせる喜びはジョーの理解を越えることなのである。ジョーとパリーの間には深い越えられない溝がある。キーツの研究者クラリッサはパリーの心情に理解を示し、ある意味で両者を結びつける象徴的存在となっている。科学と宗教を結ぶ文学・芸術の存在価値をマキューアンは示そうとしているのかもしれない。結局マキューアンはジョーとパリーの間を、ジョーとクラリッサの間ほどリアルには描くことはできなかった。既に述べたがジョーの目に映ったパリーの奇矯な言動と、ジョーが感じたパリーの精神状態しか読者には報告されないからである。科学ジャーナリストゆえ事実と仮説と確証と結論によって得られたものであるが、あくまでもパリーを外からしか描くしかないわけで、パリーの内面描写は本人が書くジョーへの手紙の中でしか表わせない。パリーの内面はと言っても手紙の文面は彼の妄想と狂気を伝えるばかりである。そこに「感情」の真実さをも伝えようとの意図はあるとしても、パリーを客観的に描き、彼の全体像を結ぶ手段は「資料Ⅰ」の学説を援用するというのも確かに妥当ではある。ジョーが科学によって突きとめたパリーの「真実」は、ジョーの語り手としての限界を補足してくれることになるからだ。しかし別の見方からすれば、きわめて皮肉な結果となる。つまり科学的にド・クレランボー症候群について詳細に客観的に分析し定義づけていけばいくほど、病名だけが一人歩きをし、肝腎な人間、個人としての人間が見落とされ、その存在が稀薄になっていくからである。「資料Ⅰ」の論文はこの物語（ジョーの語った物語）をもう一回おさらいし、要約し、解説し、「真実」を教えてくれる。なるほどわかったと読者に納得させるのだが、逆ですべてを告げられ、謎が解明し、それによって小説を読む楽しみが増すであろうか。作者が手の中の切り札を見せ、手品師がタネ明かしをするのは、推理小説の定石とはいえパリーという人間を描くには必ずしも効果的とはいえない。「資料Ⅰ」のウェンとキャミアは結論で次のように述べる。パリーのケースであるド・クレランボー症候群の妄想愛は「最も持続する愛のかたち」であり、多くの場合それが終るのは患者が死亡したときでしかない。そしてこのように結んでいる。「愛の病理学的範囲とい

うものは通常の経験と隣りあうのみならず重なりあっているのだが、もっとも尊重される経験のひとつである愛が精神病と区別がつかないという事実は、時としてわれわれ人間には承認しがたい」のである。パリーの狂気はもはや人間性の闇の中に潜むものではなく科学の明るみの中で解毒剤に漬けられてしまったような感じがする。その意味でマキューアンは彼が本当にド・クレランボー症候群を信じていたかどうかは別として、この精神の病を戦術として使うのに成功したとは考えられないのである。

ジョーの語った物語〈物語一〉と〈物語二〉はストーリーとしては面白い。プロットの立て方も巧妙である。〈物語一〉ではヘリウム気球の不時着事故に遭遇し、救出を手伝ったことでジョーとパリーが出会う。最後までロープを離さず墜落死したローガン医師、それに対してジョーが抱く無力感と罪悪感が緊密な構成の中で見事に展開される。〈物語二〉では事故現場で罪悪感と絶望感に陥ったジョーの視線がパリーと出会ったその瞬間、パリーの「愛と試練（と本人が確信した）」の物語が始まることになる。それにより同時にジョーとクラリッサのそれぞれ愛と試練の物語が始まるのである。無神論者ゆえにジョーを神に近づけようとしたものの、自分の愛が報われないと悟ったパリーは殺し屋を雇いジョーを殺害しようとするが手違いから末途に終る。護身用ピストルを入手したジョーは人質にされたクラリッサを救出すべくパリーと対決する。パリーは思いがけず、自殺を謀るため、その前にジョーの宥しを得るために彼のマンションに来たのだった。ジョーはパリーに発射し自殺を防ぐ。大団円はローガン医師の末亡人と子供達とのピクニックで、ジョーとクラリッサは和解する。

ジョーを語り手にして失うものも多かったとはいえストーリーテラーのマキューアンはあい変わらず健在である。*Enduring Love* の「本当の結末」でパリーはジョーへ変わる事のない熱烈な愛、思慕、感謝、深い喜び、神への信仰を手紙の中で語る。かつてジョーは「自己しか参照しない愛の牢獄」にパリーは囚われていると指摘したが、今彼は現実に精神病院の独房に収容されている。それでも彼の手紙はキーツが結婚によって成し遂げできなかったファニー・ブローンへの届かなくても書いたかもしれない熱烈な愛を綴った手紙を連想させる。さらにパリーのこの手紙がジョーと別れてから三年後の千通目の手紙であることから、パリーは決してジョーに届かないが毎日毎日手紙を書いていたことがわかる。あの『千夜一夜物語』のシャーラザッドのように、彼は希望と歓喜にみちて次の手紙を書く約束をするのである。パリーの愛はこれからも永遠に続くのであろう、おそらく彼が死ぬその日まで。彼は手紙の中に彼の愛の物語を語っていく。成し遂げないがゆえに熱烈で純粋でそこに感情の真実が表わされる愛を。マキューアンにとってもまだ語り尽くせぬことがあるはずだ。科学と理性では説明しきれない「宗教」の物語が。それを次作に期待するのは論者ひとりではないと信じる。

注

- (1) テキストは *Enduring Love* (Jonathan Cape, London, 1997) およびイアン・マキューアン著、小山太一訳『愛の続き』（新潮社 2000年）を使用した。本論では「持続する愛」（論者による私訳）とした。
- (2) 本作品では 'story' 'narrative' という語が頻出する。ジョーは一般読者向けに書いている「科学の物語」を幾つか披露するし、他の登場人物たちも彼らの物語を語るのである。
- (3) Oliver Reynolds "A master of accidents" TLS September 12, 1997

- 14) The Interview by Natasha Walter. *The Observer Review*. 24 August 1997 マキューアンは本作品を執筆する際に 'detective novel' に着目し、構想を得たと語っている。
- 15) 「私はストーリー」 登録せよ 朝日新聞夕刊 2000年8月19日
- 16) 新元良一「イアンマキューアン——物語を探しあてる」『海外作家の仕事場、イギリス編』『海外作家の文章読本』P.160 (新潮社、1999年)
- 17) The Interview by Natasha Walter
マキューアンは 'rationality' 'the rational' に関心があつて、*Enduring Love* でそれについて書きたかつた、と述べている。
- 18) パリーの邸が、キーツとファニーが住んでいた場所とまったく同じハムステッドであつたり母親の再婚、パリーの少年時代に起つたことなど符合する点が多い。
- 19) 新元良一「イアン・マキューアン——物語を探しあてる」P.160

参考文献

- 出口保夫『キーツ全詩集1』白鳳社 1974年
- 出口保夫「キーツ・人と作品——キーツ全詩集別巻」白鳳社 1974年
- Forman, H. Buxton. *The Poetical Works of John Keats*, Oxford University Press, London 1937
- 藤田真治『キーツのオードの世界』南雲堂 1989年
- McEwan, Ian. *The Child in Time*, Picador, London 1998
- McEwan, Ian, *The Innocent*, Doubleday, New York 1990
- McEwan, Ian, *Black Dogs*, Jonathan Cape, London 1998
- McEwan, Ian, *Amsterdam*, Jonathan Cape, London 2000
- Mars-Jones, Adam, *Venus Envy*, Chatto & Windus, London 1990
- オライオン, ドリーン・R 著 長島水際訳『エロトマニア妄想症』朝日新聞社 1999年
- Ryan, Kiernan, *Ian McEwan*, Northcote House Publishers, Plymouth 1994
- ワッサーマン, E・R. 著 西山浩訳『妙なる調べ——キーツ秀作詩』桐原書店 1987年